慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 神学的エネルギーから医学的エネルギーへ (3) : ミシェル・セルヴェ『キリスト教復位』(1553年) における生理学的神霊論 |
| Sub Title | De l'énergie théologique à l'énergie médicale (3) : la doctrine physiologique de l'Esprit de Dieu dans la Christianismi restitutio (1553) de Michel Servet |
| Author | 川村, 文重(Kawamura, Fumie) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2023 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.38 (2023. ) ,p.89- 113 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20230630-0089 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 神学的エネルギーから医学的エネルギーへ（3）

## ――ミシェル・セルヴェ『キリスト教復位』（1553年）における生理学的神霊論――

川　村　文　重

### はじめに

本誌前号でわれわれは，ミシェル・セルヴェ（1509/1511-1553年）の主著『キリスト教復位』（1553年）（以後『復位』と略記）に出てくる「エネルギー」の語が創造の際の神霊の働きやキリストの祈りの言葉において，内的に作用する力を意味していることを明らかにした[(1)]。前者におけるエネルギーは，神霊によって発され，呼吸を通して身体に入ると生命を賦与された魂になるという。この神霊のエネルギーと関連づけられた魂の形成過程を論じる一連の議論は，セルヴェ自身が発見したとされる血液肺循環が登場する重要な一節でもある。ここにセルヴェ思想の独自性として，神学的エネルギー概念と医学的エネルギー概念の接近，ひいては前者から後者への転位を見出すことができるのではないだろうか。

従来，セルヴェにとって医学は神学思想を裏づけるための一手段であったにすぎないと見られてきた。しかしながら，血液肺循環説と深く関わる

---

(1)　拙稿「神学的エネルギーから医学的エネルギーへ（2）―ミシェル・セルヴェ『三位一体の誤謬について』(1531年）と『キリスト教復位』(1554年)―」，『慶應義塾大学日吉紀要人文科学』第37号，2022年，pp. 127-149。論文タイトルの『キリスト教復位』の刊行年は誤記。正しくは1553年。

精気論においてもセルヴェの医学的貢献は無視しえない。ウォーカーは16世紀から初期近代にかけて，セルヴェの神学思想に見られる聖霊と人間の精気との間の通底性が契機となって，医学的精気が肉体と魂，あるいは物質と精神が結びつくと考えられるようになったとしている[(2)]。これはわれわれとって有益な指摘であるが，動物精気と魂の連関が議論の中心となっており，神霊と精気が連結するプロセスを丹念に追ってはいない。一方，セルヴェの聖霊論に着眼した最新の研究では[(3)]，セルヴェがキリストを介して神霊と聖霊を並列関係においたと結論づけ，その論証から，セルヴェにおいて神霊が物質性を有する，あるいは物質化していく点を引き出している。それに従えば，神的エネルギーはもはや超自然的なものではないということになるだろう。だがはたして神霊の「物質性」や「物質化」を断言することができるだろうか。

これらの問いに対して，本稿では，神霊による人間の精気の生成が血液肺循環をもとにして論じられている箇所，すなわち『復位』第１部第５巻「聖霊について問う聖なる三位一体論」の前半部の読解を通して回答を試みたい。

## Ⅰ．神から人へ―御言葉と神霊の働き

セルヴェは上記テクストの冒頭で，「神の本質とは，それが世界に顕現される限りで御言葉であるのと同様に，それが世界に伝播する限りで神霊である[(4)]」と述べている。不可視の神は御言葉によって顕現するとともに，

---

(2) Daniel P. Walker, “Medical Spirits and God and the Soul”, *in Spiritus*: IV colloquio internazionale del lessico intellettuale Europeo, Roma, 7–9 gennaio, 1983, eds. M. Fattori; M. Bianchi, Roma, Ateneo, 1984, pp. 223–244. 確かにセルヴェは神霊から精気への変容を論じる聖霊論のなかで，本稿でも取り上げるように，天上界と地上界，神的なものと物質的なものの混合ないし結合を繰り返し主張している。

(3) Christine Schulte am Hülse, “The Holy Spirit in the Theological Work of Michael Servetus. The Spirit of Unity, or from Accident to Substance”, *Church History and Religious Culture*, n. 101, 2021, pp. 214–233.

神霊の伝播によってわれわれの前に現れるが，この両者の様態こそが神の本質だという。本質が様態と一致するとしたうえで，セルヴェは神の息吹としての神霊が御言葉と対になるのは，神は話しながら息をするからだと理由づける。「話しながら息をする」という人間の身体運動をもとにして，御言葉と神霊の働きの同時性が指摘されるのである。ここでは，不可視の神は可感性と断絶しているのではなく，むしろなんらかの回路があることが示唆されており，また，神はある種の身体性を有していることが前提とされていると言えるだろう。

現に，セルヴェは『復位』第6部「フィリップ・メランヒトンに対する弁明」の中で，ギリシア教父のエイレナイオス（c. 130-c. 202年）を参照しながら，御言葉と神霊を身体的なメタファーで表現している。

> キリストの中には御言葉だけでなく，御言葉と神霊が存しており，それらはアダムの物質的実体と一体化している。また，御言葉と神霊はアダムと実体的に結びついている。それゆえに，イエスが完全であるのは彼が完全なる父なる神を受け取っているからである。御言葉と神霊という「神の二つの手」がこの生きた，完全なる人の中にあり，その中に彼の父が完全なる方法で存在しているのである。（1606-1607［694-695］）

セルヴェは，この「二つの手」の連携を通して，イエスを仲保者としながら，人と父なる神とが関係し，また，「二つの手」の働きを通して神が世界を作り，統治すると主張している。『復位』第1部第5巻において，セルヴェは「二つの手」がともに神という実体から成っていることを出発点

---

(4)　Michel Servet, *Restitution du Christianisme*, éd. et trad. R.-M. Bénin, Paris, H. Champion, 2011, pp. 458-459［163］. 角かっこ内の数字は仏語対訳に明記されている原典の頁数である。以後，『復位』を引用する際には引用末尾に仏訳と原典の頁数を併記する。また，注において同書を参照する際には，書名を省略して仏訳と原典の頁数を示す。

にして，両者に見られる四つの特質を列挙していく。第一は，「われわれの言葉と精気，あるいはわれわれの言葉と息吹は神の言葉と霊に倣っている」（458-459［163］）という，御言葉と人間の言葉の間や，神霊と人間の霊性（精気）の間に成り立つ類似関係である。人間の可視的な言葉のなかに人間の不可視の霊性が見出せるように，可視的な御言葉によって，神霊が可感的なものになるという(5)。ここにおいても，人間の言葉のうちにその言葉を発する人のこころが見えるという経験的な人間理解に基づいて，セルヴェは人から神へのアナロジーを展開しているのである。第二に，「御言葉の像とは呼吸の実体である元素的な蒸気状のものであり，すべて呼吸を通して，あらゆる方向に広がる」（460-461［164］）。つまり，御言葉が呼吸という可感的・元素的なものによる運動と一体となって広まってゆくということは，超自然的なものが元素的，すなわち基本物質と結合していることを意味する。こうして神的なものと元素的なものが密接に結びつくことで，御言葉が被造物の身体に，また，神霊が被造物の魂に授けられる。神の本質にあたるものが被造物の人間に授けられるというのである。それは神的実体と物理的物質の間の断絶が消滅し，いわば不連続の連続が生じていることを意味する。続いて第三の類似点は，発生の種子が御言葉を指すと同時に，「神霊の実体」でもある点である(6)。御言葉というキリストの発生の種子の中に神霊が実体的に含まれているという(7)。

---

(5) « *Si virtute Dei fieret, vt me loquente tu in voce mea hominem videres, id videres, quod vox ipsa significat, diceres, in sermone meo visibili esse spiritum inuisibilem, auditu perceptibilem.* »（460-461［163］）「もし神の力によって，私が話をし，汝が私の声のなかにある男を見るということがあれば，汝は私の声が意味するものを見て，私の可視的な言葉のなかに，不可視で霊的実体の中に位置付けられた私の霊があると言うだろう。」

(6) セルヴェの神学的発生論における種子の概念については，拙稿「ミシェル・セルヴェの〈自然についての神学〉―ヴォルテール『習俗試論』の一節を読む―」，『慶應義塾大学日吉紀要　フランス語フランス文学』，第73号，2021年，pp. 26-38を参照。

(7) 460-461［164］．神はキリストに息吹をもたらしながら，キリストを通して

セルヴェによれば，神が身体を創造するのに自らの言葉を用い，身体に生命を賦与するのに自らの霊を用いるのは，御言葉によって天上界が造られ，神霊によって天上界のあらゆる力能が創造されたのと同様であるという。つまり，天上界のあらゆる力能と地上界の被造物の魂が並行的類似関係にあると考えられている。セルヴェは創造において，「御言葉によって人間の物質が創造され，神霊によって魂が挿入される」（464-465［166］）とし，地上界において形態は「物質 *materia*」に，生命力は「魂 *anima*」のことだと明示している。この引用は物質の創造と魂の挿入の間を読点および順接接続詞 *et* で繋げているが[8]，これは「創世記」における人間の創造を踏まえた時間的継起性を表していると考えられる[9]。

続いてセルヴェは神と御言葉の関係を次のように捉え直す。神の御言葉を通して神が造ったものとは神自身によって神が造ったものであるという[10]。なぜなら，「神は御言葉であった *Deus erat verbum*」からである。この一文では御言葉は神の属詞であるが，セルヴェのロジックではこの関係が反転して，御言葉とは神そのものとなる。一方，神と神霊の関係についても，セルヴェは神霊によって造られたものは神自身によって造られたものだとする[11]。やはり，「神は神霊である *Deus spiritus est*」からである。ここでもロジックの反転が生じて，神霊とは神そのものとされる。このようにセルヴェは神と神による形態の創造行為を一体のものとして捉えることで，神の唯一性を強調しようとしているのであろう。

今挙げた「神は御言葉であった」と「神は神霊である」という一節をめ

---

万物に息吹をもたらすのである。キリストは，神から人へと神の実体が広がってゆく際に，両者を仲介する存在として位置づけられる。

(8)　« *Verbo eius creata est hominum materia, et spiritu inducta anima.* »

(9)「ヤハウェ神は地の土くれから人を造り，彼の鼻に生命の息を吹き込まれた。」（「創世記」第2章第7節）

(10)「神が御言葉で作ったものを，『神は御言葉であった』がゆえに，神自身によって神が作った」（466-467［166-167］）。

(11)「聖書が伝えるところによれば，神の霊によって造られたものは，『神は霊である』がゆえに，神自身によって造られたという。」（*Ibid.*）

ぐっては，もうひとつ興味深い点がある。それは両者の時制の相違である。前者の御言葉に関する一文は未完了過去で表現されているのに対し，後者の神霊に関する一文は現在形である。神が御言葉となってなされた形態ないし物質の創造は過去に属しているのに対し，神は今でも神霊であり続けている。つまり，形態あるいは物質の創造と異なり，神霊による生命賦与は一回性の出来事ではない。この永遠の創造によって，被造物が呼吸するたびごとに自身の中に神霊が吹き込まれるのであり，われわれの魂は神性の霊を有しているとセルヴェは主張する。また，神霊が人間のうちに取り込まれるのは，アダムが原罪を犯した後も続くのだと念を押す[12]。セルヴェは原罪の深刻さよりも，人間の潜在的善性を強調するのである[13]。

神が人間に魂をもたらすのは空気の息吹からであり，その魂に生命が内在化する。ここでセルヴェは，「魂 *anima*」という語がヘブライ語では呼吸と同じものを指していることに言及する。魂が空気と，空気を満たしている神性そのもののきらめきを運びこむのである。このことを主張するのに，セルヴェはアリストテレスが『魂について』の中で取り上げた，オルフェウスの「呼吸をするときに，魂が風に運ばれて宇宙全体から中に入ってくる」という主張を援用する[14]。また，エゼキエルの教えでは，「魂は元素的な実体から何かを得ている」とし，そもそも，「魂が血から何かを得ている」ことを神自身が教示していると指摘することで[15]，自らの主張を補強するのである。そして，セルヴェの議論は人間の魂と霊がどのように生まれるのかを詳細に問うために，解剖学の知見に基づいて，とりわけ

---

⑿　セルヴェは人間の自由意志を論じる際に，「われわれのうちには依然として，生得的な神性の息吹が存在している。今日においても，神はわれわれに神性を帯びた魂を吹き込んでいるのである」（1464-1465［633］）と主張している。

⒀　Jerome Friedman, *Michael Servetus. A Case Study in Total Heresy*, Genève, Droz, 1978, pp. 51-60.

⒁　アリストテレス『魂について』第１巻第５章410b。（中西正志訳，京都大学学術出版会，2001年，p. 53.）ただし実際には，アリストテレスはすべての生物が呼吸をするわけではないとしてオルフェウスを批判的に取り上げている。

⒂　470-471［169］.

生命精気の誕生を中心とした説明へと移行していく。

以上の神学議論において特筆すべき論点として挙げられるのは，第一に，御言葉と神霊の関係性を問うことは，神とキリストと聖霊を渾然一体のものと捉えることに通じており，三位一体を否定し，神の単一性・唯一性を主張するセルヴェの徹底した神学的立場がここにおいて明示されている点である[16]。第二に，神的なもの，すなわち超自然的なものと，元素的なもの，すなわち物理的なものとの混合の徹底である。その両者の混合を象徴的に示しているのが神性と人性を併せ持つキリストであり，それに倣って人間もまたその内部に神的なものを有しているとする。この混合はこの後に続く，「魂は血の中にある」という神の教えを物理的に論証しようとして，血液肺循環を取り上げる姿勢につながっていくであろう。超自然的な神的営みを，生理学的現象を参照することで解明しようとする思考態度は，セルヴェ自身が「［御言葉と神霊の］類似点は聖書を通して教示されている。自然そのものがこの類似点を教えており，われわれに被造物から創造主へと至らせるのである」（460-461［164］）という言葉に表れていると言えるだろう。彼にとって自然学の研究はあくまでも信仰を支えるためにあり，創造主の御技が観察される自然界の物理現象自体がわれわれに対して神の本質たる御言葉と神霊の働きを示唆しているのだから，われわれは知力の限りを尽くして創造主を知ろうとしなければならない。セルヴェはここで聖書研究ないし神学ありきの自然学ではなく，創造主を認識するという最終目的を目指しつつも，神学から一定程度自立した，いわば帰納法的・経験論的手法をとる学問として自然学を位置づけている。しかもセルヴェが画期的だったのは，彼が依拠したのが解剖学という16世紀に飛躍的に発展した，人体の内部に分け入る学問だったことである。神の働きは人知を超えた理解不能なものとして説明を加えることなどできないとされていたが，セルヴェは当時の発展著しいルネサンス医学・解剖学と神学議論

---

⑯　後に論じるように，これが生理学的神霊論では合理性志向となって現れる。

を統合しようとしている。この両者をリンクさせているのが，まさに今われわれが着目している神霊である。神霊の働きを生理学的精気論と連関させて，いわば生理学的な神霊論を構成しようとするのである。

## Ⅱ．〈神的哲学〉としての生理学的神霊論に向けて
## ―神的エネルギー概念を通して

しかしながら，セルヴェが生理学と神霊論を関連づけたのは，先に神学上の要請があったからだったというのもまた確かであろう。神霊と魂が繋がっており，「魂は血液の中にある」ことを物理的に説明するには，呼吸を通して人間の肺に入った神霊を含む空気が身体内の血液と混合し，しかも神霊に触れた血液が何らかの形で浄化されなければならない。その要請に叶うのが解剖学の知見からセルヴェ自身によって引き出された血液肺循環説である。心臓の静脈血は長い経路を通って肺を通過し，その際に鮮血に変わるのである。これは神の霊に触れるに等しい変化であるとして，実際に観察可能な自然現象に照らして人間の生命力および生命機能を解明しようとする生理学的神霊論は，セルヴェにとってまさにうってつけであったと言えよう。

セルヴェはまず，魂と霊の形成プロセスが把握できるように，解剖学に関する知識があれば容易に理解できる「神的哲学 *divina philosophia*」をここに追加すると述べ，精気の生成について議論を始める[17]。霊に関する神学的知識と精気に関する生理学的知識が出会う場がこの神的哲学である[18]。実詞の *philosophia*（広義の哲学，すなわち理性に基づいた学問）に「神的な」という属性を表す形容辞 *divina* を組み合わせていることから分かるように，この「神的哲学」は哲学の一ジャンルとして位置づけられて

---

(17) 471-471［169］.

(18) セルヴェの精気（ギリシア語でプネウマ）を取り上げている次の論文は彼の「神的哲学」に言及しているが，その内実を明らかにはしていない。Joan Torello, “Michael Servetus on ‘Pneuma’”, *Journal of Psychology & Clinical Psychiatry* 2, no. 2, 2015, unpaged.

おり，あくまで哲学，広く学問一般を基本軸としている。したがって，「神的哲学」とは哲学が神学化の様相を呈したものではなく，神的な現象を哲学的・理性的に捉える。つまりここでは，魂と精気の作用機序を生理学的に捉え，その手法として解剖学の知識に基づいた経験論的方法を取る。医学の中に神学を統合していくセルヴェの思考態度がこの「神的哲学」という一語に如実に反映されていると言える。

まず，セルヴェの「神的哲学」の考察対象の端緒となったのは人体内部の精気であった。古代医学以来，精気は三種に分類されてきた。すなわち自然精気，生命精気，動物精気であり，それぞれは水，空気，火という三つの上位元素の実体から成るという。また，自然精気は肝臓で作られ，生命精気は心臓で，動物精気は脳で作用する。しかもそれぞれには序列がある。最も高位にあるのは脳の活動に関わる動物精気である。しかし，セルヴェは三精気ではなく，二精気に分類されるべきとする。自然精気と生命精気はともに，神霊を含む空気によって外部から作用される血中にある精気だからである。厳密には，自然精気は静脈血中にあるのに対し，生命精気は心臓と動脈にあり，肺を通過した空気と混ざりあう血液である。セルヴェはこの二つの精気をまとめて，「血液精気」と呼んでいる。一方，動物精気については，セルヴェが後述するように，生命精気から変容したものである[19]。つまり，三精気は一つにまとめることすら可能なのである。セルヴェは神霊から魂の形成へというプロセスに関わるのが血液精気と動物精気だとし，両精気の中には，「神の唯一なる霊および光のエネルギーが存在している」（474-475［169］）と主張する。この唯一なる神霊とその光が人間の精気に活動性をもたらすのである。このように諸精気をエネルギーに還元するセルヴェの思考には，三位一体を否定して神の唯一絶対性

---

⑲「こうして，生命精気はその後，左心室から身体全体の動脈へ広がってゆき，その結果，最も微小なものが上位の部位を占めるようになる。それらの部位では，微小なものがさらに生成されていくが，それは主に，脳の下部に位置し，かつ，生命精気から動物精気が理性的魂の特定の中枢部分に達することで形成され始める網状叢で行われる。」（478-479［171］）

を見る一元論的思考と相通じ合っていると言えるだろう。

では唯一なる「霊と光のエネルギー」とは何か。それは神霊が息吹となって人間の体内に入りこむ神的な実体という，セルヴェがすでに言及してきたものを言い換えているのだと考えられよう。ここで一度立ち止まり，『復位』において「霊と光のエネルギー」と同一表現が出てくる別の一節を取り上げたい。それは第１部に収められた「神的な三位一体についての二つの対話[20]」で被造物の魂と不死性について論じる次の一節である。

> 野獣の魂は被造の光の力能から引き出され，その光の力能のなかには生命を賦活するエンデレケイアと言われるものが存している。よって，死すべき者は形態の原理により，他の消滅する物と同様にある。これら死すべき者に対して，神は大気の気息の宇宙的エネルギーのなかで自らの霊を分け与え，彼らに吸息と呼吸をもたらすのである。だが，神の霊と光のエネルギーはその他の物の場合と同様にさまざまであるため，個々の実体の不死性ではなく，観念の不死性しかないということになる。(666-667［261］)

この一節は，動物にも何らかの神性があるのか，あるとすれば不死性があるということになるかという問いに対する回答という文脈の中に置かれている。ここで問われているのは，人間と動物の峻別を前提としつつも，両者はなんらかの不連続の連続によって共通性を有しているかという問いであるとも言えよう。引用の直前でセルヴェは，「魂が身体の中に存するのは，それが純粋な空気，および身体から生じて魂に熱を与え，かつ養分と

---

⑳　副題は「神なる三位一体には三つの不可視の存在という幻影があるのではなく，御言葉の中に神の実体の顕現があり神霊の中に伝達が存するということ」である。本書は，本稿でわれわれが読解しているテクストの入った「神的な三位一体について」五巻の後に置かれ，この三位一体論を登場人物でありセルヴェの代弁者であるミカエルがペトルスに詳しく解説するという形式を取っている。

なる純粋な液体を自らに引き寄せうる限りである」（664-665［260］）と述べていた。この「純粋な空気」と「純粋な液体」とは，前者が呼吸によって体内に取り込まれる息であり，後者は体内を流れる血液を指している。ここでセルヴェは魂と身体の密接な繋がりを強調して，魂は身体なしには生き延びられないと主張する。この主張に続き前記引用で，まず不死ではないという点で人間を動物と同等に扱い，その生成消滅の原因を形態に求めている。形態とは，すでに本稿で考察してきたように，御言葉によって創造される形態，すなわち魂が吹き込まれる前の身体たる物質である。死すべき存在たる人間の身体は他の動物の身体と同様に，消滅という変化を被る。なお，エンデレケイアについて，われわれはすでに前稿で検討を行なっているのでここでは繰り返さない[21]。こうしてセルヴェの身体論において人間と動物は峻別されることなく，それらが神から神の息吹たる神霊を授かって，身体の呼吸を開始する。この呼吸の開始こそがまさに生命誕生の瞬間であり[22]，神の息吹の分有とは生命賦与を意味している。よって，生命を得るということはなんらかの神性を得るということになるであろう。その神性が神によって分有される場が「大気の気息の宇宙的エネルギーの中」である。大気について，セルヴェは別のところで，「大気の中に神的な息吹が存在し，それゆえに，大気自体が神の霊だと呼ばれている」（566-567［214］）と述べていたことから，「大気の気息の宇宙的エネルギー」とは神霊の宇宙的エネルギーのことだと考えられる。そしてそのような「宇宙的エネルギーの中」とは自然そのものとも言い換えられよう。宇

---

⑵⑴　拙稿「神学的エネルギーから医学的エネルギーへ（２）―ミシェル・セルヴェ『三位一体の誤謬について』（1531年）と『キリスト教復位』（1554年）」，「前掲論文」，pp. 141-147。

⑵⑵　「胎児は子宮内で呼吸を行っていないため，固有の魂を持ってはいない。この時点で，心臓も肺もまだ動いてはない。心臓の弁も脈管開口部の膜も誕生するまでは開かない。誕生時には素晴らしい技法によって，神的な魂が吸息され，心臓弁が開き，血液の中に精気が入り込む。［…］誕生の瞬間とは魂を備えることである。」（660-663［258-259］）

宙的スケールで大気中に遍在するエネルギーは，なんらかの実在性を持つものとして示されている。そしてそれが呼吸を通して肺の中に取り込まれると，エネルギーを介して宇宙と生物の身体が通じ合うのである。

このようなエネルギーに満ちた宇宙の動態的かつ創造的な働きは，創造主たる神の存在そのものを表している。つまり旧約聖書で語られた外的な世界創造である[23]。それは宇宙に内在する能動性として捉えられている。だが神はこのような外的な創造のみならず，新約聖書で示されているように，人間の精神を内的に創造する[24]。この後者の創造こそが，神の「自らの霊」の授与，あるいはこれを言い換えた「神の霊と光のエネルギー」に基づく内的創造であろう。この神霊ないし神的エネルギーが動物の体内に取り込まれると，生命精気および動物精気となって身体内部の肉体的・精神的構造化がなされてゆくのである。エネルギーは神の本質とみなされる神霊の実体が放つものであるため，セルヴェはこれを単なる様態ではなく，実在するものとして捉えている。ただし，このエネルギーは一定の出力ですべての生物に授与されるわけではない。生物によってエネルギーの浸透の度合いに違いがあるのだ。エネルギーの浸透度とはエネルギーの分量とも言え，エネルギーは量化されうる。だからこそエネルギーは分有が可能となるのであろう。したがって，セルヴェの言うエネルギーは，アリストテレスによるエネルゲイア概念の確立以降定着してきた，活動状態や働きそのものではもはやなく，むしろ働きによって生まれ，生物を働かせることになる実在を指していると考えられよう。

このエネルギー量の多寡について，エネルギーをより多く授与する被造物が人間であり，人間以外の動物はエネルギー浸透度がより低いということになる。よって，エネルギーの浸透によって造られる魂の生成度にも自ずと違いが出てくる。それが人間と他の動物を分かつことになるのだが，

---

(23) 拙稿「神学的エネルギーから医学的エネルギーへ（2）」，「前掲論文」，pp. 129-130。

(24) 「前掲論文」，pp. 130-132。

動物にもその魂に神性が多少なりとも授与されている。しかしながら，神のエネルギー自体は神の実体として本質的なものであるが，これが体内に入ると，神的エネルギーの度合いは偶有的なものとならざるを得ない。本質的な実体は不死性を有するが，偶有的なものに不死性はありえないという意味で，引用末尾にあるように，実体の不死性には至らず，エネルギーという観念の不死性にとどまるということになるのであろう。つまり，前記引用の後に続いて「被造の光からなる形態は完全に滅びるが，このように滅びることのない形態は神のうちに，観念としてとどまる形態である」（668-669［262］）と言い直されているように，前者の被造物の形態は時間の経過とともに滅びるのに対して，非時間性のうちにある神的な形態の観念は不滅なのである。

さて，この神的な実体たるエネルギーは宇宙的スケールで大気に遍在すると同時に，生物の身体内部を活性化させる生命原理として作用していることが明らかになった。この点から，神はマクロコスモスとミクロコスモスに絶えず関与していると言うことができる。神的なエネルギーは宇宙と人体を繋ぐ水平的な媒体であり，天上と地上を繋ぐ垂直的な媒体でもある。ところで神がわれわれに感知されるのは，第１節で述べたとおり，御言葉による顕現と神霊の伝達という二つの手段であった。これらをセルヴェは神の手段であると同時に本質であるとしているが，そうすると，本来神は宇宙の外にある超越神のはずだが，宇宙を内在させていることになるのではないだろうか。この点に，セルヴェの万有内在神論的特質を見ることができるだろう。

神的エネルギーが神的実体であるとすれば，それが神的実体である以上，完全に物質的なものとして捉えることはできない。だが身体に取り込まれた神的エネルギーについてはどうか。セルヴェはプラトンの『ティマイオス』を援用して，「魂の実体は元素的実体と神的実体のある種の混合」だとし，「魂の実体は両者を併せ持つある種の第三の中間的実体」（492-493［178］）であり，なおかつ，「一方で超元素的原型に類似し，他方で下位の

原型，すなわち生命的で動物的な自然の唯一なる魂に類似している」（492-495［178］）と結論している。身体に取り込まれた神的エネルギーは完全に超自然的なものとして捉えてはいないのだ。それは被造物が神と分有でき，神的なものと元素的なものの媒体として実在性を有するものであるからこそ，他の物質と同様に，個々の実体は不死性を持たず，その観念のみが不死性を有するということになる。セルヴェは魂の実体として形態的観念とともに「霊的物質 *spiritualis materia*」を挙げているが[25]，これはまさに霊と物質という本来相容れない本性を併せ持つ神霊のエネルギーを指しているのであろう。この中間的媒体こそが神と被造物をつないでいるのだ。

エネルギーはまったき神的なものでありながら，物質的作用が密接に関わることで中間的性質を帯びる。この点において，本稿のはじめに取り上げた先行研究が主張する物質化傾向に対して一定の留保が必要であろう。セルヴェにおいてエネルギーは実在化されてはいるが，物質化されるまでには至っていない。とはいえ，セルヴェの神的エネルギー概念に基づいた神的哲学がさらに展開されれば，その先には生命の起源の脱神秘化が待ち受けているのは確かであろう。

## Ⅲ．神的エネルギーから生命精気の生成へ―血液肺循環をめぐって

では『キリスト教復位』第１部第５巻「聖霊について問う聖なる三位一体論」のテクスト読解に戻ろう。まず神によって吹き込まれたアダムの魂は，口と鼻から心臓に入り，動脈を通って肝臓に移動する。その間に，心臓に命が宿ると，ここが身体中の熱源となる。セルヴェは肝臓と心臓の関係について，「水が上位元素に物質を提供し，それに光が加わると活性化して自ら生命活動を起こすようになるのと同様に，心臓が肝臓から生命の水を自らの物質として受け取ることで，肝臓と心臓が互いに生命を賦活し

(25) 664-665［260］.

あう」（474-475［169］）と述べている。アナロジーを用いて展開されるこの引用文の前半部に出てくる冒頭の「水」は後半部の「生命の水」である血液に対応している。セルヴェは，魂の物質は肝臓で血液が「感嘆すべき洗練化」（474-475［169］）されることによって生じると言う。「感嘆すべき *mirabilis*」という形容辞を用いることで，セルヴェはここに超自然的な神的働きを見ていることがわかる。そのうえで，旧約聖書では魂が血液の中にある，あるいは，魂とは血液それ自体や血液精気であるとして，魂が心臓や肝臓といった臓器や脳の中にあるとはみなされてこなかった点に着眼し，神霊を含む息吹および血液からなる生命精気の発生を医学的に解明する必要性を訴えるのである。

こうして，セルヴェの医学的考察が集中して展開される箇所は生命精気の解明から始まる。そのなかで，古代のガレノスによる肺機能の理論に修正を加えるという体裁を取りながら，血液肺循環説が提示される。では順に詳しくみていこう。まずセルヴェは生命精気の根源とその発生メカニズムについて次のように説明する。

> 生命精気のおおもとは心臓の左心室にあり，その発生を助けているのが主に肺である。これは熱の持つ力によって精錬された，赤く可燃性の微細な精気であるため，最も純粋な血液から生じ，水・空気・火の実体を内部に含んで輝く揮発性物質のようなものである。この精気は吹き込まれた空気と精妙・洗練された血液とが肺の中で混ざり合うことで発生し，心臓の右心室から左心室に運ばれる。（476-477［170］）

生成された生命精気は心臓の左心室に収まっているが，生成される場所は肺である。すでにセルヴェは生命精気が神霊の息吹と血液から成っていることに言及していたが，これは基本元素としては空気と水だと言い換えられる。だがここで新たに指摘されるのが，生命精気は熱によって精錬されるという点である。よって，火の元素が生命精気の構成要素に加わる。生

命精気を形容する「赤く」,「可燃性の」,「微細」はそれぞれ，基本元素の水，火，空気に対応することになる。さらに,「輝く」という性質を有しているのは，熱の働きによって微細な精気が空気の動きとともに輝きを放つからか,「空気を満たしている神性そのものの輝き」(470-471［168］) ゆえにか，神がわれわれのうちに吹き込む息吹が「神の光の輝き」(496-497［180］) であるがゆえに，生命精気自体に神性の光が分有されているからのいずれかであろう。つまり，生命精気の輝きは被造の光によるものか，神的な光によるものかの二つの可能性がある。この精気が生成される肺は呼吸に関わる臓器であるが，呼吸以外にも血液を空気にさらすという役割を担っている。神性を含む空気と洗練された血液が出会うのがこの肺なのだ。実際に，肺における血液純化は再生を意味しうるため，肺は神霊の受け入れ口となる臓器としてまさにふさわしいと言えるだろう。

セルヴェによれば，肺で発生した生命精気は心臓の右心室から左心室に移動する。しかし，ガレノスの理論では，まず肝臓で作られた血液が空静脈を通って上方に運ばれて心臓の右心室に流れ込み[26]，心臓の中隔にある微細な孔を通して左心室に流れていき[27]，ここで精気状の血液が作られるとされていた。栄養を含んだ少量の血液が心臓の中隔の微細な孔を通って左心室に入りこみ，そこでこの血液と肺から送られた空気が微細化して精気に変質するというのである[28]。ガレノスにおいて，精気が生成される場

---

(26) ガレノス『身体諸部分の用途について』第２巻，坂井建雄・池田黎太郎・福島正幸・矢口直英・澤井直訳，京都大学学術出版会，2022年，pp. 107，115。

(27) 「多量の血液が中央の隔壁［心室中隔］でそこにある孔を通して左の空所［左心室］に受け入れられる」ガレノス『前掲書』p. 152。

(28) ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説について』より「混和の点では湿であり色調は赤い血液は，まず肝臓でできる。それを運び全身に分配する導管は静脈である。一方，黄色くて温かくて微細分化してプネウマ（精気）状の血液は最初に心臓の左心室ででき，この種の血液は動脈が動物の全身に配送する。」（第６巻第８節）Galen, *On the Doctrines of Hippocrates and Plato*, second part: Books VI-IX, second unrevised edition, ed. Phillip de Lacy, Berlin, Akademie Verlag, 2005, pp. 414-415.

所は左心室であり，肺が関与するのは単に血液を微細にする空気を補給するために過ぎない。それに対してセルヴェの理論では，心臓と肺の相互に対等な働きかけ，異質なものの交流・交差が活発に行われている。生命精気においてはむしろ肺が中心的な場であり，神霊という外部から人体に入り込む神的実体が血液と混合されることによって精気が生成されると考えられているのである。

続いてセルヴェは，生命精気を含んだ血液の移動経路を次のように説明する。

> ところで，この移動が行われるのは一般に信じられているように，心臓の中隔の仕切りを通してではなく，大いなる技術によって，精妙な血液は右心室から，肺を経由して長い経路を流れていく。血液は肺で準備されて赤くなり，動脈性静脈から静脈性動脈へ運ばれる。その後，正確には静脈的動脈内で，吹き込まれた空気と混合され，呼気によって暗色から純化される。こうして最後に，全体の混合が左心室を起点にした心拡張によって引き起こされる。以上が生命精気の発生を可能にするのにふさわしい手段一式である。（476-477［170］）

冒頭の「一般に信じられているように」がガレノス以来の血液理論を指していることは明らかである。それに対し，セルヴェは右心室から左心室への血液移動は心臓にある中隔を通ってではなく，肺を通る長い経路，すなわち血液肺循環を主張している。この過程は「大いなる技術によって *magno artficio*[29]」と表現され，肺の動脈を通った血液が肺の静脈内で空気にさらされることで鮮血に変わる。なお，「動脈性静脈 *vena arteriosa*」は肺動脈を指し，「静脈性動脈 *arteria venosa*」は肺静脈を指す[30]。実際は，

---

(29)　仏訳は « un important processus（重要なプロセス）» としている。Servet, *Restitution du christianisme, op. cit.*, p. 476.

(30)　ガレノスは肺において静脈は動脈性に，動脈は静脈性を有すると考えていた。

血中の酸素と二酸化炭素の交換のことを言っているが，セルヴェの時代にはまだ空気の構成要素が明らかになっていなかった。生まれ変わった色鮮やかな血は肺の静脈と動脈を結びつける毛細血管の中にある生命精気を含む血である。すなわち，生命精気とは体外から取り込まれた空気にさらされた血液のことである。こうして再生された血液は，肺の静脈から心臓の左心室に移動するという経路をたどる。そしてこの浄化された血液は，強力な収縮・拡張によって左心室から出発して動脈を通じて身体中に送り出される。これが「全体の混合」を意味するのであろう。これら心臓，肺，肺動脈，肺静脈，吹き込まれた空気が生命精気を生み出す材料と道具であり，それらは基本的に物理的な素材に限定されており，なんらかの神秘的な作用が働いているようには描かれていない。セルヴェにおける生命精気生成論は，徹底して医学的・生理学的な側面を前面に押し出す。そこでは，神による創造を語るときにセルヴェが用いる「驚くべき技法で *artificio mirabili*」などのような人知を超えた質に関する表現は用いられず，血液肺循環の長い血管はむしろ「大いなる技術で *magno artificio*」と規模の大きさに関する可視的で客観的な形容詞が使われるに過ぎない。生命精気に対するセルヴェの眼差しは完全に医学者のそれである。

こうして突如，神学者の口調から経験論的医学者の口調に変わるセルヴェは，解剖学実験で明らかになった，肺を通る血管の大きさという客観的構造の特徴から，肺の機能を具体的かつ高い精度で推論する。

> 移動ならびに生成がこのように肺を通して行われていることは，肺の中での動脈性静脈と静脈性動脈の様々な接合と連絡を通して知ることができる。それは動脈性静脈がかなり太いということから確認される。

---

「すべてにおいて賢い自然は無駄に闇雲ではなく，全ての動物においていかなる物も無駄に作ることなく，肺の脈管の外被を交換して，静脈は動脈性に，動脈は静脈性に作った。」ガレノス『身体諸部分の用途について』445,『前掲書』第 2 巻，p. 121。

もし単に肺が養分を受け取るためだけなら，動脈性静脈はこのような方法で，またこれほどの太いものにすることはなかったであろうし，心臓自体から肺に至るまでに，これほどの大きな力で最も純粋な血液を送り出すこともないだろう。ましてや心臓が肺の奴隷となるわけがなかろう。ガレノスが論じているように，胚珠の中では微細な膜，すなわち心臓の弁が誕生の瞬間まで開かないため，肺自体は心臓以外から栄養を受け取っていたのだから。よって，誕生するまさにその瞬間に心臓から肺に向かって大量に血液が送られるのは別の用途によるのだ。そのうえ，肺から心臓へ静脈性動脈を通って送られるのは単に空気だけでなく，血液と混ざった空気である。つまり，混合が行われているのは肺の中なのだ。空気の混ざった血に赤みがつくのは肺によってであり，心臓ではない。左心室にはこれほど重要で大量の混合を行う場所がなく，赤色をつけるのに十分な生成も行われていない。（476-479［170-171］）

すでにセルヴェが述べていたように，生成された精妙な血液が心臓の右心室から左心室へ移動する一連の動きは心臓の中で完結することなく，肺を介して行われる。これは生体解剖が可能であれば直ちに解明できることであろうが，セルヴェがパリで行ったのは死体解剖であった。ではどのようにしてこのような肺の機能を解明することができたのだろうか。

その出発点は，ガレノスの肺動脈の見方に対する疑義にあった。ガレノスによれば，肺の動脈は非常に太く，その理由は肺に栄養を与えるためであるとしている。

栄養に関することは，肺では生体の他の部分とまったく逆になっている，本体の形に関することも同様である。身体の他の部分でこれほど粗放で軽く精気性のものはなく，またほとんど純粋で希薄な空気性の血液によって養われるものもないことが分かるだろう。密で厚い静脈

［肺動脈］は肺と栄養を分け合うことが少ないが，その分すべてを薄く純粋で蒸気性の血液を豊富に送り込む動脈［肺静脈］が埋め合わせている。しかしこれは温かいよく動く内臓［肺］では充分でない。自然が肺にとても大きな静脈［肺動脈］を創り上げたのは，外被の緻密さのせいで栄養を充分に与えられない分を，それらの大きさによって補おうとしたためである[31]。

ガレノスにとって肺は呼吸と発声を司る内臓である。だが養分を外部から得るには，外被が緻密なために血管を太くすることによって少しでも多くの養分を取り込む必要があるという。また，緻密な器官が活動しやすくなるのは，肺が大量の吸息をしたり，大きな声を発したりすることで肺の動脈が最大限に拡張・収縮するからである。肺に送られる養分は，他の臓器が肝臓から養分として静脈血が送られるのと異なり，心臓からのみに限られている。「心臓の中で完全に加工されて希薄になった血液が送られる[32]」のである。このようにしてガレノスは生体の創造者がなぜ非常に太い肺動脈を造ったのか理由づけたのであった。肺が心臓によって養われるのを，「心臓は血液からの栄養を肺に返礼のようなものとして与えているように見え，これを肺から受け取る空気への見返りとして与えているように見える[33]」と述べている。

それに対しセルヴェは，肺が養分を得るのに必要な血液はそれほど多くはないはずであり，ガレノスが主張するような栄養補給のためだけにしては，肺動脈があまりにも太いという点に合理性を見出すことができないと主張する。それはむしろ自然が無駄にやみくもであり，生体の創造の欠陥を意味することになるためである。セルヴェが上記引用中で「ましてや心

---

(31) ガレノス『身体諸部分の用途について』451-452,『前掲書』第 6 巻第10章，p. 124。

(32) *Ibid*.

(33) 『前掲書』444-445,『翻訳書』第 6 巻第10章，p. 120。

臓は肺の奴隷となるわけがなかろう」と語気を強めているのは，ガレノスが心臓によって肺が養われるのを，心臓が空気を送り届ける肺への返礼として血液から栄養を与えていると述べていたのを受けてのことであろう。それに対し，セルヴェは肺動脈が太いことの合理的理由として，心臓が全身に送り出す血液が大量に通過するためであると見抜いた。すなわち静脈血を動脈血に変化させるためである。それはすでにセルヴェが述べているように，肺の中で静脈血が空気に触れることによってである。ガレノスの言うように，肺は呼吸と発声のためだけの器官ではない。血液の再生の器官でもあるのだ。ガレノスの理論では血液再生は心臓の左心室で行われているとしていた。だがセルヴェは，左心室の容量が空気との混合を行うに不十分である点に着眼し，ガレノスの理論を否定するに至ったのである。

この肺と心臓の働きに関するガレノス理論との対比は，セルヴェとほぼ同世代で解剖学史に名前を残したヴェサリウス（1514-1564年）によるガレノス理論との距離の置き方と対照的である。彼の『ファブリカ』第6巻によれば，

> 心臓の中隔は，先に述べたように，厚い心臓の素材からできており，少なくとも感覚によって確かめられるかぎりは，ただ一つの孔も右心室から左心室に貫くことはない。こうしてわれわれは，血液を右心室から左心室に，われわれの視覚を逃れる経路を通して滴り出せる創造主の技に，驚かざるをえないのである[34]。

ヴェサリウスは解剖学実験で，心臓の中隔には孔がまったく存在していないことを観察していたにもかかわらず，この孔の不在とガレノスの理論と

---

(34) *The fabric of the human body: De humani corporis fabrica libri septem*, Andreas Vesalius; an annotated translation of the 1543 and 1555 editions by Daniel H. Garrison and Malcolm H. Hast; [with contribution by Vivian Nutton, Nancy G. Siraisi], Basel, Karger, 2014, 2 vol., t. II, p. 1192b. Vesalius, *De humani corporis fabrica libri septem*, Basilea, Johannes Oporinus, 1543, p. 589.

の矛盾に疑義を呈することなく，それを創造主の御技に訴えることでガレノスの権威に従っている様子が窺える。この態度と比較すると，セルヴェはガレノスの矛盾を放置したり，その謎を神に訴えて解決をみたりすることなく，自然の，あるいは神の可視的な合理性という基準に依拠することで，ガレノスの権威に正面から挑む姿勢が際立っていると言えるだろう。

セルヴェは心臓の左心室から右心室へ，すなわち動脈から静脈への血液の流れが心臓の中隔の仕切りを通って生じているという一般に信じられている考え方が不適切であることを再び取り上げ，それがガレノスの血液理論に由来するものであることを明示する。

> 最後に，この心臓の中隔には血管もなく，手段も欠いているため，たとえ多少の漏出がありえたとしても，今まで述べてきた血液移動と生成には適していない。肝臓で血液が門脈から大静脈へ移入するのと同様のプロセスによって，肺では精気が動脈性静脈から静脈性動脈へ移入する。今述べたこととガレノスが『身体諸部分の用途について』の第６，７巻で述べたことを比較すれば，ガレノス自身が気づいていなかった真理を深く理解することができるだろう。(478-479［171］)

ガレノスよれば，死亡直後にしばらく続く体温低下と身体硬直のために死体解剖では見ることができない心臓壁の孔を通して血液が移動する[35]。肺

---

(35) 『自然生命力』第３巻第15節「動物の大血管を切って動物を殺すと，静脈が動脈とともに空虚になっていることがわかる。これは両者の間に吻合がなければ決して起こりえないことである。同様にまた，心臓自体において，血液の最も希薄な部分は右心室から左心室の中に引き込まれるが，これは両者の間に穿孔があるからである。この穿孔はかなりの部分にわたってみられる。それは広い開口部をもった一種の窪みのようなもので，先細になっている。しかし，それが小さいし，また動物が死ぬとどの身体部分も冷たくなって縮んでいるために，その先の先を実際に観察するのは不可能である。」Galen, *On the Natural Faculties*, with an English translation by Arthur John Brock, “The Loeb classical library 71”, London, W. Heinemann, 1916, pp. 320-321.

の中には，末端部と同様に，静脈と動脈をつなぐ吻合があるが，絶え間なく流出入するものではない。血液が肺から心臓に戻ってくるなら，それはただ弁の漏出のせいである。それに対し，実際にはありえないにもかかわらず，引用中でセルヴェが心臓の中隔を通して血液の「多少の漏出がありえ」ると譲歩しているのは，顕微鏡を用いた観察を行っていなかったためであろう。しかしながら，セルヴェは血液が右心室から肺を通って左心室へ流れることを正確に推論することができたのであった。さらに，血液が動脈から静脈を通って，精気を含んで再生されるという流れは，肝臓の周りの門脈から大静脈への血液移入との類比から導き出される。門脈は胃で作られた栄養分を豊富に含んだ静脈血が肝臓に運ばれる際に通る主血管であり，この静脈血は肝臓内の毛細血管に入って栄養分を分配したのち大静脈を通って心臓に移動するという経路をたどる。この肝臓を起点とした静脈の動きは基本的にガレノスの理論を継承している。ただそのために，セルヴェは心臓がポンプの役割を果たして血液を全身に送り出し，動脈と静脈を通って血液が心臓に戻ってくるという血液大循環の発見には至らなかった。なお，この血液循環は17世紀にハーヴィーによって発見されたが，それはガレノスによる心臓の心室間の血液移動説を否定することによって打ち立てられたものであった[36]。いずれにせよ，引用末尾の「ガレノス自身が気づいていなかった真理」が心臓の中隔に孔が存在しないこと，動脈から静脈の移動は心臓という単一の臓器の内部で完結せず，肺こそが血液再生を担っていることを指しているのは確かであろう。

以上のように，徹底した医学的・生理学議論を展開するセルヴェの生命精気論は「魂は血である」という旧約聖書の教えをもとにして，魂が心臓や肝臓や脳などの身体の一部に動かずに収まっているのではなく，全身を絶えず駆け回るものというビジョンを示している。セルヴェは外的宇宙の動態性と身体というミクロの世界における動態性が通底していると考えて

---

(36)　ハーヴェイ『動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究』暉峻義等訳，岩波書店，1961年，pp. 34-35。

いたと言えるだろう。

## おわりに

セルヴェの思想にはどの点においても，神の単一性・唯一絶対性への志向を看取することができる。そのひとつが本稿第1節で取り上げた御言葉と神霊の働きを通してみることのできる，本質と様態ないし働きの一体性である。一体化・一元化の構造は第2節で考察したように，精気について論じる彼の「神的哲学」においても，三精気を単一の精気の様態変化とみなし，どれも神的エネルギーという共通した構成要素からなっているとして統合化しようとした点に見られる。そのうえ，魂の形成を論じることと精気の生成論を論じることを直結させるセルヴェにおいて，もはや魂と精気は区別されない。だが多くのルネサンス人文主義的医学者が考えたように，医学的な精気が肉体と魂をつなぐ媒体とみなすのではなく[37]，セルヴェは呼吸によって生命を帯びると同時に神性を内部に有するとみなされた魂そのものを，神霊と二重に結びつけられた「媒体」だと定義している[38]。いずれの場合においても，一体化・一元化が可能となるのは神的なものと物質的なものをつなぐ媒体が実在しているからだと考えられている。そして，それはセルヴェ独自の神的エネルギー概念が持つ媒介性においても当てはまる。呼吸によって身体に入って生命を賦与する神霊のエネルギーは霊性を帯びながら，なんらかの実在性をもつ「霊的物質」として，神学的エネルギーであると同時に医学的エネルギーの性質を帯びた中間的媒体となるのである。

この一体化・一元化への統合論理は，第3節で論じた血液肺循環説の構築の契機となった，左心室での血液再生を主張するガレノス理論が示す矛盾の乗り越えにおいても活用される。左心室には血液再生を行うのに十分

---

(37) Hiro Hirai, *Medical Humanism and Natural Philosophy. Renaissance Debates on Matter, Life and the Soul*, Leiden; Boston, Brill, 2011.

(38) 492-493［178］.

な容積がないため，再生は心臓ではなく肺で行われているという推論を提起したのである。この視点の転換によって，血液肺循環説は合理性を持つものとなった。セルヴェの「神的哲学」がたとえ肺の合理的な働きを解明することを通じて神の英知を讃えることに寄与するためであったにせよ，別言すれば，目的論ありきの経験論的学問であったにせよ，一貫してそこに〈合理的な統合〉が働いていたことは間違いない。ここに，神学的世界観から科学的世界観へ移行する過渡期をまさに体現するエネルギー概念論および精気生成論として，セルヴェ思想の一側面を捉えることができるだろう。

**付記**：本研究は科研費（課題番号18K00109）の助成を受けたものである。